

2020年の振り返りと2021年の取組みについて

(2021年5月24日「品質会議」での報告)

【2020年の振り返り】

- 2020年、当社では、パートの人も含めた形で、品質管理に関する社員研修を実施しました。この社員研修では、講師の先生のご理解とご配慮を受け、当社の実情を前提にしつつ、これまでの日本の品質管理の取り組みとそとで培われて様々なノウハウを学ぶことができました。またこの研修の結果、社員相互間の問題意識の共有が進み、更なる教育研修に対しての意欲の高まりがありました。
- 経営基盤を強化するため、協力会社との関係の強化も進められました。
- 既存のお客様との関係の整備でも、担当体制の見直しや、できることとできないことの切り分けなど、いくつかの取り組みがなされました。
- 社内で取り組んでいるシステム開発は、どうだったか。
 - 1) 各種制御系システム
 - 2) 生産工程管理システム
 - 3) サロンシステム
 - 4) ホテルシステム
 - 5) Web系システムこれらのシステム開発では、その開発の目的の明確化とリスクのコントロールに力を入れた取り組みを行いました。その中では、手探りの開発になってしまい、難しい問題もありましたが、お客様からのご指導を受けながら、当初の方針を踏まえて、「成長促進」のためのシステム開発を進めることができました。
- 2020年の品質目標との関係で整理してみます。
 - 1) サロンシステムは大きく進み、ますます多くのお客様に活用していただけるようになりました。これは、どのようなお店を目指すのかということの基本に据えた新しいコンセプトによるサロンシステムとして、今後もますます成長させていくべき重要なシステムになっています。
 - 2) ホテルシステムでは、ホテルスタッフのサービスレベルの向上のための新たなサブシステムが稼働し始め、これも新しい局面を迎えています。
 - 3) 生産工程管理システムでは、そのコストパフォーマンス、機能の利便性、社員ファーストの特長が評価され、お客様の協力会社様への導入計画が立てられるようになりました。
 - 4) 多岐にわたる課題に対しては、社員研修の実施や、社内レビューの質の向上など、意識的な取り組みを行うことができました。※ まだまだ道半ばとは言え、また、いくつかのプロジェクトでは当初の予定通り進めることができなかつたものもありましたが、それでもコロナ禍という困難な環境のなかにあつて、品質方針・品質目標に沿った取り組みと前進を確認することができたと言えます。

【2021年の取組み】

- まず外部環境について、留意すべき問題があります。
 - 1) 経営者の高齢化
 - 2) コロナの影響
 - 3) 受注の遅れ・停滞

4) 社会的閉塞感

- 当社は、独自の営業チャンネルをもっていません。そのため、お客様の状況に全面的に依存しています。当社がうまくいくためには、当社のお客様の発展が不可欠です。

これまでの当社の実践と経験を鑑み、お客様との関係をよりよくし、互いに発展していくためには、それが誰のタスクかを見極め、適切な距離感と緊張感をもって誠実に対応していくことが大切になります。

- 何れにしても、2021 年は、総じて前年より厳しい年になると予想されます。これに対して、経営の維持のため以下のことを実施します。

- 1) 採算管理の見直し
- 2) 社員の待遇の改善のための努力
- 3) 経費の節約

- 既存のお客様との関係を丁寧に継続することが何よりも大切です。

協会会社様との安定的関係の維持は、経営基盤を支える重要な課題です。また、現在は受注が減少しているかも知れない既存のお客様を大切にする必要があります。ビッドシステムの歴史は、お客様に育てられた歴史であったことを再確認し、課題を常時整理し、見直し、対策を立てる日常活動を丁寧に行います。

- システムの開発を通して、ビッドシステムのソフトウェアの目的をより具体的に示していきます。常に目的を意識し、限られたリソースを効率的に運用していきます。

- コロナ禍が示したものとして、様々言われています。

- 1) 前には戻らない
- 2) 時代を進めた
- 3) ことの本質がより見えてきた
- 4) …

とはいえ、ビッドシステムとしてやるべきことは明確になっています。

- 2021 年の品質目標は、2020 年のものを維持することにしました。

ビッドシステムの事業目的は何か。

- ◇ コンピュータシステムの開発導入を推進し、生産性の向上に貢献し、社会全般の経済的発展に寄与し、社会的不幸を減らす。
- ◇ この過程で、ステークホルダーとの社会的関係を豊かに育て上げていく。
- ◇ そのポイントを、「成長促進」のためのシステム開発におく。

※ 今年もまた、常に目的から考え、限られたリソースを効果的に運用し、コンピュータシステムの開発によって、いっそうの社会的貢献をしていくよう努力していきます。